

せいねいてんわう  
清寧天皇、

はじ しらがのみこ しょう  
初め白髪皇子と稱し、

ゆうりやくてい だい  
雄略帝の第三子なり。

は、 ひ かづらぎのからひめ  
母は妃葛城韓媛。

てんわう うま はくはつ  
天皇、生れて白髪、

ちやう たみ あい こころ  
長じて民を愛するの心あり。

てい とく これ いちよう  
帝、特に之を異重し、

た くわうたいし  
二十二年、立て、皇太子となす。

ゆうりやくていほう  
二十三年八月、雄略帝崩じ、

ほしかはのみこ ふき はか  
星川皇子、不軌を謀りて、

おほくら よ  
大藏に據る。

おほむらじおほとものむらじむろや  
大連大伴連室屋、

やまとのあやのつかのあたへ  
東漢掬直とともに、

う これ たひら  
討ちて之を平ぐ。

みづのえさる むろや  
十月四日壬申、室屋、

ぐんしん ひき  
群臣を率ゐて、

じ くわうたいし たてまつ  
璽を皇太子に奉る。

ぐわんねんかのえさる  
元年庚申、

みづのえね  
春正月十五日壬子。

いうし  
有司に命じて、

だんぢやう いはれのみかぐり まう  
壇場を磐余甕栗に設け、

てんわう くらゐ っ  
天皇の位に即き、

つひ こゝ みやこ  
遂に焉に都す。

これ しらがたけひろくにおしわかやまとねこのすめらみこと  
是を白髪武廣國押稚日本根子天皇となす。

しよせい かづらきのからひめ たつと  
所生葛城韓媛を尊びて

くわうたいふ じん い  
皇太夫人と曰ふ。

おほおみへぐりのすくね まとり  
大臣平群宿禰眞鳥・

おほむらじおほとものむらじむろや もと ごと  
大連大伴連室屋、故の如し。

かとうし  
冬十月九日辛丑、

ゆうりやくてんわう はうむ  
雄略天皇を葬る。

はやと  
隼人あり、

みさぎ かたはら がうきふ  
陵の側に號泣すること七日夜、

食せずして死せり。

いうし れい もつ これ みさぎ きた はうむ  
有司、禮を以て之を陵の北に葬る。

二年辛酉、春二月、かのとどり

天皇、てんわう

子なくして名の後にこのち

傳はらざらんことを憂へ、つたうれ

大伴連室屋に命じて、おほとものむらじむろやめい

白髪部舍人・しらがべのとねり

膳夫・靱負を諸國に置かしむ。かしはでゆけひしよこくお

冬十一月、播磨國司はりまのこくし

伊興來目部小楯奏すらく、いよのくめべのをたてそう

市邊押磐皇子の二子、いちのべのおしはのみこ

億計王・弘計王、おけのみこをけのみこ

赤石郡縮見屯倉のあかしのこほりしづみのみやけ

首忍海部造細目が家いへにありと。おびとおしぬみべのみやつこほそめ

天皇、大に喜びて、てんわう

小楯をして節せつを持し、をたて

左右の舍人を率ひぎゐて

之これを迎へしむ。むか

三年壬戌、春正月丙辰の朔、

小楯、億計王・弘計王を奉じて、

攝津に至る。

臣連をして節を持ちし王の青蓋車を以て

迎へて宮中に入れしむ。

夏四月七日辛卯、

億計王を立て、皇太子となし、

弘計王を以て皇子となす。

秋九月二日癸丑、

臣連を諸國に遣はして、

風俗を巡省せしむ。

冬十月四日乙酉、詔して、

犬馬器玩を献ずることを罷めしむ。

十一月十八日戊辰、

臣連を大廷に宴して、綿帛を賜ふ。

是の月、海表の諸蕃、

使を遣はして貢調す。

四年癸亥、  
みづのとゐ

春正月七日丙辰、  
ひのえたつ

しよばん つかひ てうどう えん

諸蕃の使を朝堂に宴して、

もの たま しな

物を賜ふこと差あり。

なつうるふ

夏閏五月、

たいほ

大酺すること五日。

みづのとうし

秋八月七日癸丑、

てんわう

天皇、

みづか しうと ろく

親ら囚徒を碌す。

えみし はやと

蝦夷・隼人、

ならび ないふ

並に内附す。

ひのえね ついたち

九月丙子の朔、

ゆはどの ぎよ

射殿に御し、

ひやくれうおよ しよばん ちよく

百僚及び諸蕃に敕して

しゃ

射せしめ、

もの たま

物を賜ふこと

おのおのしな

各差あり。

五年甲子、  
きのえね

つちのとうし

春正月十六日己丑、

てんわうほう

天皇崩ず。

かふち

さかとのはらのみささぎ

はうむ

河内の阪門原陵に葬る。

つゐし

せいねいてんわう

い

追諡して清寧天皇と曰ふ。